

個体群管理(新潟県の事例)

長岡技術科学大学 生物機能工学専攻 准教授

山本 麻希

新潟県では、2002 年に 2 巣の繁殖が確認されて以来個体数が増加し、現在では 13 カ所のねぐら・コロニーが県内に分布し、夏期には 2000 羽以上のカワウが分布している。

2007 年に新潟県のカワウの被害状況についてアンケート調査を実施したところ、カワウは冬鳥として飛来している数の方が多いと報告されていたが、冬ねぐらは海岸付近に分布し、サケが中心となる冬期の内水面漁業には被害が少ないことが明らかになった。一方、春～夏にかけて作られるコロニーは、内陸に分布し、アユの釣り場や養鯉業を営む地域に近接していること、さらに、カワウの繁殖期には親が採餌する餌量が増えることから、内水面漁業や養鯉業に深刻な被害を与えていることがわかった。そこで、新潟県のカワウ対策は、春～秋にかけて内陸に分布するコロニーのカワウ対策に重点を絞り、管理を行うことにした。

コロニー管理の方向性としては、規模が小さく、被害地に近い、比較的新しく作られた巣はビニール紐を張ることで撤去し、被害地に近いが、規模が大きく、成立年代の古い巣は、巣立ち雛の銃器による捕殺とドライアイスによる繁殖抑制によって繁殖規模を縮小させる対策を行うこととした。また、被害地から遠いコロニーについては、モニタリング調査のみを実施し、繁殖抑制は実施しないこととした。

被害地に近く、大きなコロニーとして、十日町市小根岸の事例を紹介する。2007 年 7 月に最大数 1124 羽のカワウをカウントし、県内の被害の中心となっていた。そこで、小根岸の繁殖成功率から個体群の増加率を計算し、このコロニーの個体数を減少させるには、何羽の雛を捕獲すべきか目標を立て、継続的な繁殖抑制を実施した。毎年 350 羽の雛の捕獲を 4 年以上継続して実施したところ、繁殖個体数は緩やかに減少した。また、2010 年、2012、2013 年にドライアイスによる繁殖抑制を実施し、その孵化抑制率と繁殖抑制の対費用効果を推定した。その結果、最終的には 2013 年の 4 月の繁殖開始個体が 230 羽まで減少した。

新潟県は、一部のコロニーでは繁殖抑制による個体数管理に成功したが、県全体としての個体群管理計画がなかったため、新潟の悪夢が勃発してしまう。2014 年頃から、信濃川水系中下流域にある水道町のコロニーの樹木が何者かに違法伐採されるという事件が発生した。その結果、2013 年に最大 351 羽いたカワウが翌年から激減し、2015 年には 0 羽になった。このかく乱により、水道町にいたカワウが、15km 程度離れた渡部や五辺、そこからさらに 15km 上流の小根岸へと分散していった。その後も毎年、小根岸では雛撃ちによる繁殖抑制を実施していたが、個体数の増加は止まらず、2016 年には再び 873 羽まで増加してしまった。また、新しく拡大傾向にある渡部でも H29 年には 327 羽まで個体数が増加した。また、小根岸からさらに 15km 上流に新しく宮中ダムという 45 羽程度の小規模コロニーの分散が生じた。

